

音 楽 科

徳 田 典 子
西 村 真理子

1 音楽科における「よりよい未来を志向する子」

子どもが心を揺さぶられるような音楽と出合い、友達とともに表現活動や鑑賞活動に取り組んでいくことは大切である。そして音楽そのものが与えてくれる感動や美しさの中に身を置いたとき、子どもは「音楽っていいなあ、楽しいなあ」という思いをもつ。また、ハーモニーがもたらす調和的なわくわくする一体感や、十分に表現しきった達成感や満足感を得たときにも「またやりたい、もっとやりたい」という意欲がわいてくる。音楽が日々の生活の中の潤いやエネルギーチャージのもととなったとき、それは「あれば、うれしい」「生活に寄り添う」ものとなる。そしてその延長線上にあるのは、生涯音楽である。大人になっても目的をもって音楽そのものを楽しむために、自ら音楽にかかわり続ける。

本校の音楽科では、みんなで歌うことを心から楽しんだり、グループで工夫を凝らして器楽での表現活動をしたり、異学年交流会で上級生の演奏にあこがれをもったりなど、安心感をもって自由に表現し、感動したり楽しさや満足感を味わったりすることを大切にしてきた。授業での「音楽は楽しい」「音楽があるとうれしい」という体験は、生涯音楽の小さな一歩とも言える。そして音楽活動の中で音楽的な文化の深さや広さ、そして多様性に触れ、たとえ共感できなくても他者の音楽的文化の在りようを認めることにつながっていると考えている。

音楽活動の中で子どもは自ら「こんなふうにやってみたい」「これができるようになりたい」という願いをもち、他とかかわりながら思いやイメージを表出する。そして音楽活動の場や体験を仲間と共有し、試行錯誤しながら感性を研ぎ澄ませて表現しようとする。そのように自分のよりよい表現を追い求めることは、音楽によって感情が変化することを自覚したり音楽的な好みをもったりなど、変容をもたらす。そして、そういう自分にとっての音楽の価値に気付くこともできる。そのような思いが充たされる音楽をめざすことで、子どもは未来を志向すると考える。

以上のことから、音楽科における「未来を志向する子」を次のようにとらえる。

あこがれや願いをもとに 思いやイメージを表出し 音楽活動の場や体験を仲間と共有しながら 自分のよりよい表現を追い求め 自分の変容や自分にとっての音楽の価値に気付いていこうとする子

2 音楽科における決める授業デザイン

音楽と出合って、あこがれや願いをもつには、どのような音楽と出合うのかということがとても重要になる。それは演奏楽器・演奏形態・演奏方法などがこれまでに経験のない、自分にとって新しい音楽のことである。そのような音楽に出合うことであこがれや願いをもち、なりたい姿を思い描く。そうすることで子どもはゴールを決めることができ、見通しをもって自分のよりよい表現を追い求めていこうとする。

自分の思いやイメージを、仲間との音楽的な活動の場で伝え合ったり共有したりするためには、思いやイメージの言語化が必要である。表現内容や表現方法についての感想やアドバイスを具体的な言葉で伝え合うことで、自分の考えが揺さぶられる。そこから変化が起こり、表現したい内容や目標に対して決め直しも行われる。多様な視点に触れることで、自分の思いや表現を客観的に見直し、感性を研ぎ澄ませてよりよい表現を追い求めようとする態度が育まれる。

また、ひとつの題材を取り組み終えたとき、取り組み全体を客観的に俯瞰して自分の成長を確認する。できたこと、できなかったことを中心に「ゲット（獲得）したこと」は何であるかに気付かせる。またそこから、音楽に取り組んだことが自分にもたらした成長や変容、音楽が自分にもたらしたことは何か、ということにも意識を広げ、そして自分にとっての音楽の価値にも気付かせていく。

3 決める授業の手だて

(1) 教材との出合わせ方によりあこがれや見通しをもたせる工夫

子どもが新しい音楽と出会い、あこがれや願いをもつには、どのように音楽と出合うのかということがとても大切である。子どもの興味・関心、そして音楽的な発達段階や習得した技能にぴったりの「ちょっと難しそうな」音楽や取り組みに子どもが出合ったとき、その表現に驚きやあこがれをもち「おもしろそう！やってみたい！」とチャレンジの気持ちちがわき上がる。また「自分にできるようになるのかな」と微かな不安を感じたときでも、子どもの心は揺さぶられ「難しそうだけど、でもやりたい」と意欲をむき出しにする。強い願いとともに習得していく内容を決めることは、意欲が継続し、新たな技能習得への原動力ともなる。そのために、教師は子どもの状態を見取り、新しい音楽と出合わせるタイミングを見極めることが重要である。

さらに、どのような順序で学習を進めていけばよいかを子どもとともに決めるために、ゴールを設定し、なりたい姿を思い描く。そして既習の学習パターンや習得パターンをふり返って学習の見通しをもつ。そうすることで、これまでの学習がどのように活かされるのか、もうすでに身に付いているスキルが新たな習得に生きることに気付き、「やればできそうだ」という期待感や安心感にもつなげていく。

(2) イメージを言語化し多様な視点で考える工夫

子どもが自分の思いや表現を客観的に感じたり判断したりするためには、他とのかかわりがはずせない。自分の思いやイメージを言語化することで、考えを出し合ったり伝え合ったりして、場と多様な視点を共有することができる。同じテーマを扱っていたとしても、解釈やアプローチ、そして音楽的な好みによって表現や表現方法に多様性が生まれる。友達やプロフェッショナルの表現を鑑賞したり、また自分の考えや表現に対して多角的なアドバイスをもらったりする場を設定することで、子どもは思ってもみなかった視点で自分の表現を見直すことができる。そうすることで自分の思いやイメージが揺さぶられる。そして、よりよい音楽表現を求めてもう一度表現内容や目標の決め直しが行われる。子どもは自分が表出したい内容を客観的にとらえ、位置づけ、評価し、また自分の好みの傾向にも気付くことができる。また、よりクリアに自分のしたい表現を表出させるには、どう受け取られるのか、どう受け取られたいのか、受け取り手を意識した工夫が必要になる。そこで演奏者と聴き手に役割を分担し、役割を順に回していくパターンの交流を行う。また、演奏の録音再生によって一人が役割を変化させる手法も使用する。演奏に対して感想やアドバイスなどの客観的な考えを出し合い、その中で自分の表現方法について自覚し、何を新たに選択するのか、改善点や方策などを決めることで、それは可能になっていく。

(3) 自己の変容と音楽の価値に気付くための工夫

一つの題材を取り組み終えたとき、子どもの心には、はっきりと言葉にすることができる思いが現れたり、そうではないもやもやとした感覚が残ったりする。それらを言語化して自分の学びとしての認識を得るために、ゴールを決めて活動したことによって自分がゲット（獲得）したこと（或いはできなかったこと）とは何かという観点でふりかえりを行う。決めることによって何を新たに得たのか…技能なのか、表現力なのか、プロデュース力なのか、演出方法なのか、或いは友達関係なのか、仲間なのか、そして満足感なのか…多岐に渡るだろう。こういうふうを決めて活動したのだから、こういう結果であるべきだという、これまでの経験による観念の枠をはずして、結果の意外性や多様性を受け入れることも大切である。そのためにゲットした（できなかった）内容をクラスや学年で共有し、お互いに思いを伝え合ったり認め合ったりする場を設けていく。さらに、なぜうまくいかなかったのかを根拠となる事実から考えることは、次につながっていく。したいように表現することを可能にする基礎基本の技能習得の重要性に気付き、練習の意欲がわくこともある。また決め方そのものをふり返ることも大切である。ゲットしたことにフォーカスしたふりかえりとその共有は、音楽が自分にもたらす変化や成長、また自分にとっての音楽の価値に気付くことにつながり、音楽というもののとらえ方も変化していくと考える。

(1) 教材との出会わせ方によりあこがれや見通しをもたせる工夫

1年生「わくわくキッチン」の実践から

1年生の入学前の音楽経験は子どもによってばらばらである。そこで、ユニバーサルデザインという観点で音楽科をとらえると、どの子どもにももっている楽器としての声から、音楽経験を積ませる必要があると考えた。本題材では、ハンバーグが出来上がっていく様子をあらかず歌詞から発展させ、他の料理のレシピに当てはめた替え歌をつくることをねらう。



資料1 「わくわくキッチン」を
楽しみながら歌唱する姿

この曲は、キッチンにてハンバーグが出来上がっていく様子が歌詞にあらわれている。子どもは、様子や歌詞をもとにして体を動かしながら、四分音符や四分休符、八分音符からなるリズムを意識して拍の流れにのって楽しく歌うことが出来る(資料1)。

はじめに、材料の種類や調理のしぐさなど、料理が仕上がっていく様子をイメージしながら、メニューを決める。この曲の替え歌にする調理の過程を歌う箇所では、原曲同様にくりかえしを3回するという約束事を提示した。子どもは、その条件設定があることで、歌詞の精選が必要となり、ワークシートに示した歌詞をつないだり、即興的に選んだり修正を加えながら、レシピの構成を決めていった。

また、この時期の子どもは物事を感覚的にとらえる傾向にあるので、簡単な絵譜を使うことで、自分の決めたリズムを書き残し、そのリズムがみんなに伝わっていくことを体験させたいと考えた。

「わくわくキッチン」オムライス

ごはん	ほくほくほく	○○○●
たまねぎ	とんとんとん	①①○●
たまご	とんとんぽかっ	○○○●
フライパン	ひびひびひび	○○○●
ケチャップ	とろとろとろ	①①○●
おいしそ	くんくんくん	○○○●

資料2 Aグループが決めたレシピ

まず、替え歌にする調理の過程を歌う箇所部分の表記では、言葉に合ったリズムを考え、手拍子を打たせた。子どもは言葉を通して、4拍の中に「タン」「タタ」がいくつも入っていることに気付いていった。さらに、リズムを絵譜○●で表記したことで、自分の考えを可視化することができ、そのリズムが友達に伝わっていくことを体験させる手だてとなった(資料2)。まとめの表現では、考えたレシピを表現する場をつくり、友達と一緒に表現を楽しめるようにした。

そこで、この曲のリズムに合った動きや歌詞から連想される料理の様子などを、どのように表現するかについても話し合わせた。Aグループでは、たまごのフレーズの「とん・とん・ぽかっ」の動作にこだわっていた。オムライスにはなくてはならないたまごを調理する動作は、割れたときの様子や音を表現したいという強い思いがあった。

また、このレシピでは、ごはんの様子の部分が「ほく・ほく・ほく」となって完成したが、はじめは、「たき・たき・たき」であった。他のグループからのアドバイスでは、「たき・たき・たき」は様子ではないと指摘され、納得して修正をした。

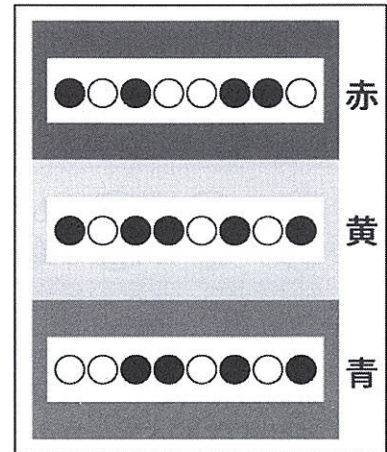
本題材では、子どもが歌うことを楽しみながら、のびのびと活動することができた。この時期の1年生にとって、生活経験からイメージしやすい楽しい歌唱教材との出会いは、発達段階に適していて、学習に進んで取り組むことにつながると感じた。

(2) イメージを言語化し多様な視点で考える工夫

5年生「リズムアンサンブルをつくろう～トライアングルの音楽づくり～」の実践から

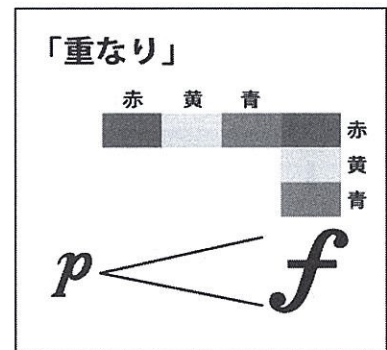
本題材では、インターロッキングの音楽の仕組みを生かしたリズムアンサンブルをつくる。音楽の仕組みや曲の構成などの条件設定することで多様な表現を引き出すことをねらう。また、表現の交流では、演奏の聴き取りを通して、どのようなことをイメージして、意図をもって演奏したかを解き明かす方法をとる。

はじめに、より豊かな発想を得るために、音素材のトライアングルをつかって即興的に表現させる。各グループには、6種類のトライアングルと5種類のビーターを与え、いろいろな組み合わせを試すことから、生み出す響きのよさを理解させる。この活動を通して、アンサンブルのテーマの発想を得るようにする。次に、グループとしてのリズムパターンを3種決めるために、一人一人が考えたリズムパターンをもとにする。各グループでは、赤・黄・青と3種類のリズムパターンを決める(資料3)。また、決めた3種のリズムパターンを、3色(赤・黄・青)のマグネットシートを用いて示すことで、グループの構想した音楽を図として、可視化する方法を取る。ここから、アンサンブルの曲の構成を決める活動に入る。



資料3 Bグループが決めたリズムパターン

Bグループでは、「目覚まし時計」というテーマタイトルで、重なる部分の演奏を構想する。3種のリズムパターンは、それぞれが1台ずつの目覚まし時計として設定した。Bグループの考えたストーリーによると、曲の始まりで、まず、村の3台の目覚まし時計をセットする。重なる部分は、3台の目覚まし時計が順番に鳴り出したのに、主人公が起きないので、目覚まし時計を一斉に鳴らすということをイメージし、村の3台の目覚まし時計をセットするというシーンである。よって、重なる部分の構想図では、3台の目覚まし時計(赤・黄・青)が順番に鳴り出したのに、主人公が起きないので、目覚まし時計を一斉に鳴らすというシーンをイメージして考えられている(資料4)。

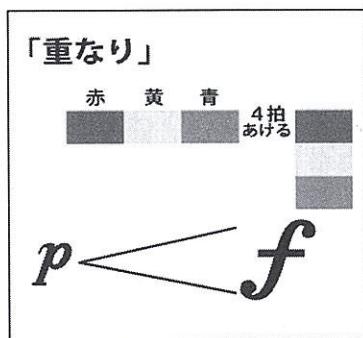


資料4 重なるの構想図

表現の交流では、構想図を提示して演奏をした。Bグループでは、構想図だけを手がかりにすることで、実際の演奏から意図した表現が聴き手に伝わると予想していた(資料5)。だが、他のグループの子どもからは、演奏から伝わらない部分があると指摘があった。B児によると、「構想図を見て、演奏を聴いたら、赤・黄・青はそれぞれが音色の違う目覚まし時計だと伝わるけど、三つのリズムパターンの重なり部分の入り方がバラバラになってしまい、Bグループが何を表現して伝えているのかがわからない。」という感想であった。

ぼくは、伝わると思います。なぜかという、重なる部分のストーリー(村の目覚まし時計がいっせいに鳴る)に合わせて、だんだん音を大きくしていったからです。そのために、赤チームは、小さめ、黄チームは、ふつう、青チームは大きめのトライアングルを意図的に選んだからです。赤→黄→青→全部の流れで、重なる部分を演奏するので、伝わらないわけがありません。さらに、とく田先生から教えてもらった「オープン」と「クローズ」を使いわけなど、自分たちで工夫して音を出している、このような理由から、Aグループ、Cグループには伝わる自信があります。

資料5 Bグループ テーマ「目覚まし時計」A児による重なり部分の表現の交流前に記述したワークシート



資料6 再構成の構想図

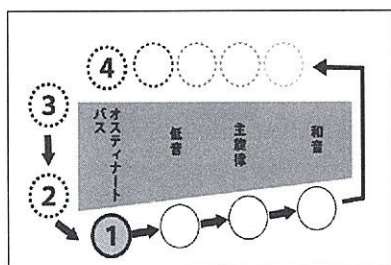
そこで、Bグループはこの後の再構成のための話し合いをもった。話し合いでは、聴き手との意識のずれをじっくりと考察することで、新たな意見があがった。C児は「この三つの重なりの入り方がはっきりしないから伝わらなかったのだと思う。赤・黄・青の後に、間を4拍ぐらい入れて、その後にみんなと一緒に重なりを演奏したらどうだろうか?」という意見であった。Bグループでは、新しい意見や聴き合いの活動から得たアドバイスを取り入れて、表現の再構成をした(資料6)。

ここでの聴き合いで重視しなくてはならないことは、聴き手の応答だと感じた。聴き手は、相手の伝えたいことを正確に聴き取ろうとする姿勢をもつことが大事であり、共感したことや納得したことを伝え合うだけでなく、時には異論を投げかけたりすることで、全体でより深く考える場面が充実される。このように、友達の伝えてくることを受け止め、組み合わせ、また再構成することで、消化し、自分のものにするというくりかえしから、多様な視野からの熟慮ができる。

(3) 自己の変容と音楽の価値に気付くための工夫

6年生「いろいろな音のひびきを味わおう ～ぐるぐるマリンバ～」の実践から

本題材の「ぐるぐるマリンバ」は、1台のマリンバを使って、大勢の子どもが4種類の旋律をカノン(輪奏)形式で演奏することをねらう。子どもは、4種類の旋律の奏法をある程度習得した時から、グループでカノン形式の演奏を始める(資料7)。この段階にくると、子どもはまとまりのある演奏にするには、どのようなことに気を付けたらよいのかを考えるようになる。



資料7 カノン形式の演奏方法

本題材の学習のふりかえりの目的としては、本題材の手だてが有意味学習として有益であったかを確認するものである。また、子どもにとっては、この学習から得た成果、結果や感情のはたらしを見つめ直すこと、または、この学習に対してふり返る必要があることをはっきりさせるための手だてである。ふりかえりの方法としては、記述する方法とグループでの

ディスカッションを取り入れた。ここでは、記述のふりかえりについて述べる。

カノン形式は、横に移動すると、すぐに音を弾かなくてはならないから、4つの旋律をきちんと覚えて、みんなに迷惑がかからないようにしなくてはならないです。早く上手になりたいです。(B児)

資料8 1回目のふりかえり

記述するふりかえりのタイミングとしては、次のように考え、3回の実施をした。1回目は、カノン形式の4つの旋律の曲想と音楽の構造の関わりについての理解をしたころ、「この曲をどのように演奏したらよいか」についての設問を用意した。ふりかえりによると、四つの旋律を正しく覚えることと移動をしながら演奏するというカノン形式の奏法が課題となってくる(資料8)。その後、B児は四つの旋律を正しく演奏するという技術的な反復練習の取り組みを通すことで、この曲の特徴をさらに理解し始める。2回目は、この曲を演奏

するために必要な技能が身についたタイミングに実施し、聴き合いの後に「この曲の特徴にふさわしい表現の工夫について」のふりかえりをした。

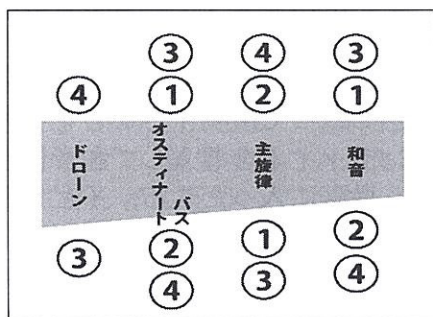
2回目のふりかえりによると、速度、強弱や奏法などの表現の工夫についての課題をあげ、思いや意図が演奏から聴き手に伝わるように、グループで試行錯誤し、問題を解決してカノン形式の演奏を醸成しなくてはならないと考えるようになる(資料9)。そこで、各グループが工夫した表現を互いに聴きながら、それぞれのグループの表現のよさを認め合う体験を積ま

せていった。3回目では、「この学習を通して、学んだことは何か」ということを設問し、題材の終末に、学習過程をふり返って、この活動で身に付けたことや友達との協同学習における感情の働きや推移についてのふりかえりを記述させたいと考えた。3回目のふりかえりでは、5年生の音楽づくりでインターロッキングの音楽の仕組みを生かしてつくったマリンバアンサンブルの演奏形態（資料10）との比較についての記述が多くある（資料11）。B児は、これまでに習得した知識や技能を活用することやこの学習過程で得た新たな知識や技能を習得することを比較することで、演奏形態の違いに応じた演奏の仕方を身に付けるようにすることが大切だと考えている。

ふりかえりでは、回を重ねるごとに、この学習をしていることの意味付けをすることやプロセスから得たことをもとにさらに学ぶこと、また、すでに既習した知識などを整理して学んだことなどが表出されてくるようになった。また、この学習の進度に伴い、深まっていく子ども同士の心の結びつきを見取ることができた。

Cグループはマレットをたたいたり、テンポをとったりしてチームワークが良く、演奏が上手かったです。それから、Aグループでは、演奏順を意識して決めなかったから、演奏が途中でくずれました。それから、マレット渡しのタイミングも大切だと思いました。

資料9 2回目のふりかえり



資料10 専門家形式の演奏方法

カノン形式の演奏は、専門家形式と違った達成感がありました。かなり協力して演奏を教え合い、みんなで話し合い、完成しなくてはならなかったです。また、カノン形式で演奏すると、チームがまとまることわかりました。また、チームの友情や絆が深まりました。またみんなでカノン形式での演奏がしたいです。

資料11 3回目のふりかえり

このように、ふりかえりをするには、自分の知識や体験したことや感情を見つめることを通して、意味を構築するプロセスをつくり出した。また、グループでのディスカッションでは、課題が生まれるだけでなく、成果を共有することで、活動への意欲が向上する姿が見られた。

成果と課題

主体的で創造的な表現活動を意図的に取り寄せたことで、子どもは音楽活動の楽しさを体感した。低学年では、基礎的・基本的な内容を題材のデザインの中で散りばめることや遊びの中で自然に身に付けていけるようなデザインにしたことで、音楽に浸って楽しく歌うことができた。また、簡単な絵譜を見てリズムを打つという手だては、これからの音楽の学習の基礎をつくる上で重要だと感じた。高学年においては、学習過程のどの段階で、どのような技能を習得させるかを意図的にデザインしたことで、領域が横断的となり、さまざまな技能を習得することができた。また、ふりかえりを目的や方法を明確にして上で、授業デザインの中に織り込むことができたことも成果である。ふりかえりは、子どもだけでなく、教師にとって、子どもが何を学んでいることが明らかになる手だてでもある。よって、そこから自らがデザインした学習過程を確認することになる。ふりかえることで、子どもの学習の深化を確認し、その具合によっては、新たに学習が促進される仕掛けや手だてを導入しなくてはならないことに気付く。今後の課題としては、子どもが学んでいることや学んだことを自覚できるような方法を考えなくてはならない。また、思考、判断、表現する一連の過程を大切にしたい授業を構想し、子どもの深い学びが生起するために、その領域に合った効果的な手だてを明確にしていきたい。

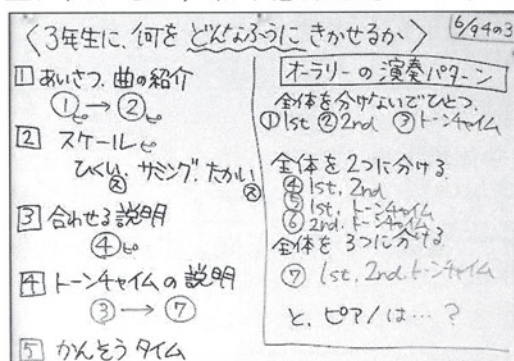
(1) 教材との出合わせ方によりあこがれや見通しをもたせる工夫

4年生「せんりつの重なりを感じ取ろう～曲の気分を感じ取ろう」の実践から

昨年度まで、子どもと演奏表現のめざす姿に到達するために、イメージを生かし、どんな工夫をするとよいかということを大切に「クラッピングファンタジー」の第1～3番に取り組んできた。今年度の4月、1学期の音楽は、どんなことをがんばりたいかとたずねた。リコーダーをもっと上達したい・新しい楽器に取り組みたい・また発表会をしたい…など意欲的な思いがたくさん出された。そこで1学期の最後には必ず発表会をしようと、ゴールを子どもと決めた。発表会を設定することで、子どもが聴き手を意識し、目的意識をもってプログラムやなりたい姿を決め、そこへ向かって見通しをもって活動できると考えたからだ。

教材曲にリコーダー2部合奏曲の『オーラ・リー』を選び、ハ長調のスケールやサミングの練習と並行して1stパートと2ndパートの譜読みを始め、曲のイメージや旋律の重なりを感じ取って演奏することを中心に、学習を進めてきた。さらに新しい楽器の音色としてトーンチャイムを導入して和音伴奏をつかった。そろそろ全楽器全パートを合わせてみようという段階に入ったころ、子どもと発表会のもちかたについて話し合いをした。

今回は学年全体の交流ではなく、クラス単位で3年生と交流会をもちたいということのみ教師から提案し、内容についてはすべて自分たちで考えを出し合って、プランを決めることにした。練習した曲を単に聴いてもらうだけではなく、4年生になるとリコーダーでどんな学習をするのか、どのぐらい鳴らせる音が増えるのか、それによってどんなことができるようになるのか、どんなことに気をつけなければならないのか、そして演奏することがどんなふうになるのか…などについて、どういうふうにアプローチしていくとちゃんと3年生に伝わるか、相手意識をもって考えながらプログラムを決めていた(資料1)。



資料1 3年生との交流会の計画の記録

また曲についても、水の精のイメージや二つのパートがあることなど、聴いてほしいポイントについてわかってもらうためにどう伝えればよいか、考えを出し合って決めていた。ゴールの姿を意識したことで、その後の練習では上手く演奏するためということももちろんあるが、プログラムの順番にどんな意味があるのか、何を伝えるためにどうするのかなどを確認しながら、どう魅せるか聴かせるかを意図しながら、必要感をもって考えを出し合い、練習を進めるようになっていった。

(2) イメージを言語化し多様な視点で考える工夫

3年生「リコーダーとなかよしになろう」の実践から

3年生は1学期にリコーダーの基本的奏法の習得に取り組んだ。昨年まで取り組んでいた鍵盤ハーモニカとは違い、リコーダーはきれいな音を出すことが難しい。発表会で上級生が演奏したときの音色や、教師の範奏の音色を聴いたのと、導入時に子どもが自分で吹いてみて出てくる音があまりに違うので、子どもは驚きショックを受けた。「何か音が違う…」「自分が吹くとピーッと鳴って耳にキーンてくる。」「どうしたら先生みたいな音ができるの?」と口々にしていた。そこで「ともかく耳で聴こえたとおりに先生の真似をして、先生と同じ音を出そうとしてね。」というやり方で、運指が01のシの音を使って息のコントロールとタンギングの基礎の習得を始めた。最初は上手いかなかった息のコントロールも、「まねっこ練習」を重ねるうちに、息の量やスピードのバランスを感覚的にだんだんつかめるようになっていった。そして、出したい・聴きたい音と実際に出てくる音がどんどん近づいていった。

シ→ラ→ソ→ド→レと段階をふんでスモールステップで、吹く音の数を増やしながら練習曲に取り組ませると同時に、曲のイメージからどんなふう演奏したいか決めて音を出すということにも少しずつ取り組ませた。シの『ボエム』は「きれいなトゥ(タンギング)」でウツトリする感じで吹きたいな…ラシの『さくら笛』は桜が満開なしっとりした感じで…ソ

だ。」という考えのグループに分かれた。そのやり取りを聞いていた子どもが「どっちもわかるし、どっちもいい。だから自分で選びたい。」と発言したことで、自分でどちらかに決めて演奏することになった。音にしてみると、とても繊細な空気感が満ちて演奏に感情が乗っていた。子どもは「ここまで曲の感じが変わるんだ。」とロ々に驚きを表し、『花笛』の味わいに共感し、演奏の喜びを共有していた。こうして友達とかかわることで、視点が変わったり広がったりして子ども同士が「なるほど〜。」と唸るような、素敵な場面が創造されることもある。

ここまでの、曲のイメージから吹き方を考えて奏法を自分で決める取り組みは、順調に成果が現れていた。そこで即応的なデザインとして、4年生との交流会で3年生もリコーダーの演奏を披露して4年生に聴いてもらうことを子どもと決めた。3年生は交流会で4年生の演奏を1年生のときから聴いてきている。今回初めて聴いてもらう方の側にも立つこととした。それまでは、自分がどんなふうに吹きたいかということが一番重要であったが、そこにどんなふうに聞こえるのか・聴いてほしいのかという相手意識が加わった。練習後のふりかえりでは、「やさしい感じを出そうとして、弱すぎる息で吹く人がいると音がそろわなくなるから、ちゃんとしっかり音を出して吹いた方がいい。」「息つぎの前の音が短くなりすぎないように気を付けた方がいい。」「曲の出だしの最初の音が、ばらばらにならないようにもっと合わせよう。」などの聴き手を意識して考えた話し方もきかれるようになった。さらに『ソラシドマーチ』では、前半（スタッカート）と後半（レガート）の感じの違いをもっと出そう（B児）という、さらに曲の構成に踏み込んだ考えが出される場面もあった。

(3) 自己の変容と音楽の価値に気付くための工夫

3年生「リコーダーとなかよしになろう」の実践から



資料6 3・4年生の音楽科交流会の様子

ふだんの音楽室で4年生とクラスごとに交流会を行った（資料6）。3年生は左手だけの運指で既習曲を5曲発表した。4年生に演奏を聴いてもらい、「音色が美しい。」「タンギングが完璧にできている。」「音がぴったりそろっていてすごい。」「ソラシドマーチの楽しい感じがよく伝わってくる。」などの褒め言葉や、うれしい感想をもらった。交流会の後、「今回のとり組みでゲットしたこと」という視点でふりかえりを行った。以下はその抜粋である（資料7）。

D児のように技能の習得を書いている子どもはたくさんいた。音色と息のコントロールを絡めて書いている子どもやタンギングありなしの聞こえ方の違いなど、客観的な視点のある自己の変容を多くの子どもが書いていた。さらにE児やF児、G児のように4年生との交流で、リコーダー2部合奏、サミングの技法、またトーンチャイムの演奏などにあこがれをもち、練習意欲の高まりについても多く書かれていた。さらにH児のように仲間といっしょに演奏することの喜びを書いている子どもや、A児のように曲想に合った表現の工夫の必要性に気付いている子どももいた。そして、C児のように音楽の喜びに触れている内容を書いた子どもは学年全体に広がっていた。

音楽はとても楽しいとあらためて思った。（C児）

きれいな音で吹けなかったが、だんだん上手に吹けるコツがつかめてきた。（D児）

4年生からおしえてもらったことを早く2学期にやりたい。（E児）

もっともっと練習して、うまくなりたい。（F児）

リコーダーに興味をもった。夏休みに習った曲を練習して4年生に近づきたい。（G児）

みんなといっしょに音楽の授業ができてうれしかった。（H児）

曲の雰囲気を考えて、その雰囲気にあった音を出すこと。体をゆらすこと。（A児）

資料7 「1学期の音楽の勉強でゲットしたこと（3年生）」より

4年生「せんりつの重なりを感じ取ろう～曲の気分を感じ取ろう」の実践から

計画通り3年生との交流会を開催することができた。自分たちでやりたいと願い、プランを練り、技能を習得し、リハーサルを行い、本番を迎えた。プログラムも司会も自分たちで決めた。以下は今回の取り組みでゲットしたことという視点のふりかえりからの抜粋である。

仲間と努力してチームワークをつくると、努力したことが2倍になること。(I児)

協力し合って、最高の本番(J児)

「みんなとの演奏」みんなと演奏すると、聴いて気持ちよくなる。(K児)

みんなで合わせるための大切さ、聴き合う楽しさ、声のようなリコーダーを吹く。(L児)

トーンチャイムの構造、音が出る仕組みに興味(がわいた)(M児)

リコーダーの運指のひみつ どうなってるの?(N児)

いい音が出るように、吹くときの力のコントロールをもっと上手にしたい。(O児)

自信をもって吹いたり鳴らしたりすること。(P児)

緊張しても、しっかり吹けるようになった。(Q児)

資料8 「1学期の音楽の勉強でゲットしたこと(4年生)」より

4年生は自分たちの力で企画運営したので、I児・J児のように仲間との協力について書いている子どもがとて多かった。その中でも、K児・L児のように仲間と聴き合って演奏する楽しさや気持ちよさについても、特にたくさん書かれていた。M児・N児は楽器の構造や発音原理、音を変える仕組みについて興味や疑問を書いている。トーンチャイムについては、楽器の大きさと音程の関係性について興味をもった子どもや、リコーダーの運指に法則性があるのかなのか…例外がなぜあるのかということに疑問をもった子どももいた。3年生の演奏を聴いたり3年生に自分たちの演奏を披露したりして、O児のように自分ももっと上達したいと感じている子どもはたくさんいた。そしてP児・Q児のように、今回の取り組みでの精神的な成長を書いている子どもも複数いた(資料8)。今回、「できなかったこと」を書いた子どもはいなかったが、目的をもって音楽に取り組むことで、音楽が自分にもたらした自分の変容を、音楽のもつ価値としても意識していけるよう、今後個々の子どもの気付きを学年で共有できるように進めていきたい。

成果と課題

中学年までの音楽では、体をゆるめて気持ちを解放し、音楽が得意な子どももそうでない子どもも同じ音楽活動の場で、「いまここ」を共感しながら体を揺らして心の底から音楽を楽しむことができているか、ということをおお切にして、子どもとともに授業をつくってきた。音楽室が、心を解放し、安心できる場所であるように、常に気を配ってきた。その中で、プランや表現内容・表現方法などを決める行為を子どもにも託した。すると子どもは一番よくするにはどうすればよいかと、ベストをつくそうと、その考えや行動の実現手段を模索した。

一人で考えて決めても、言葉で表出すると周りのみんながレスポンスをくれる。それによって、自分の考えに更に自信がもてたり、よりよく更新されたり、変えたりできる。そして、また決める。教師の仕事は場の設定と、方向付けだ。進むべき方向からそれゆくと、矯正したくなるが、我慢だ。子どもが自ら気付くまで言いたくても我慢することは大切だ。

決めたことが行動によって具現化されていく。やってみて、気付くことがたくさんある。それをみんなで共有するには、伝えるための言語が必要だ。「こう言えば、伝わるんだ。」「うまく伝わらなかったのは、何に原因があるのかな。」伝わらないからこそ、何とか伝えようと子どもは考える。教師の仕事は、子どもの思考のポイントを絞ること。どこにフォーカスさせたらうまく思考が流れるか、伝わるように表出できるか、ほんのちょっとアドバイスする。また、出しゃばらない例え話をして、別の視点があることに気付かせたり、音楽的要素をもち出して考えを分類したりすることで、子どもの思考がすっきりすることもある。

気付きやアドバイスをお互いに受け取り合うことができると、自分の考えや表現を客観的に評価・判断できる。そのよさを実感して、そこからまた、よりよく決める場面が生まれていく。

最後に取り組み全体をふりかえり、自分の成長や変容を確認することで「やっぱり音楽ってすごい。すてき。大好き。」と、生涯音楽の小さな一歩がうれしさとともに歩まれるのだ。